

部落問題文芸作品選集

第13卷

大泉黑石著

豫言

世界文庫版

部落問題文芸作品選集 第十三卷

昭和四十九年八月十日発行

発行者 松 本 富 夫

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二―二―一五
電話〇三(七一六)六一五一(代表)
(七二三)九二四四(夜間)
振替 東京 七八四九八番 千一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

「地上に生れたあらゆるものにとつて、生命は一つの長い老衰に過ぎない。大自
然は絶えざる廢滅に銳意である。一切萬物は常に死に向つて急ぎつゝある。この
世もやはり他の被造物のやうに、絶滅に到る時が来るであらう。嘗ては人類の驚
異として、奇怪な發達と急激な變化を伴ふた偉大な帝國が、一とたび去つたその
あとには、何の痕跡をもとめないやうに、この世の跡もまた悉く眼にふれるこ
とがなくなり、たゞ、たゞ、空漠とした沈黙と、深い靜寂のみが、この空間を充
たすであらう。さうして、この不思議な神秘である宇宙に於ける生存といふ恐ろ
しい謎は消え去り、その意味が看破られ、解決されるまへに、永遠に姿を隠して
了ふであらう。」(ジヤコブ・レオバルディ)

形動不生形而生影。聲動不生聲而生響。無動不生無生
有。形必終者也。天地終乎。與我偕終。終進乎。不知
也。道終乎。本無始。進乎。本不久。有生則復於不生。
有形則復於無形。不生者。非本不生者也。無形者。非
本無形者也。（列子）

序

本來「豫言」と名づけられる筈であつた本書は、出版者側の希望により大宇宙の黙示と改題されて世に出でたことがあるけれども、それが例の關東大震災火災直後であつたことゝ、その他の事情によつて著者が期待するほど廣く讀まれず中絶の形となつてゐた。これを遺憾として、酒井氏は著者にすゝむるに、本書の復活を以てした。かくて再び本來の面目に還つて、世に出る運びとはなつた。著者の欣びには、まことに少なからぬものがある。

大正十五年九月一日東京府下長

崎村大和田の寓居にてしるす

著者

豫

言

大泉黑石著



「死刑執行の時刻は近づいた。今晚の十時には、一つの若い生命が、いよいよこの地上から消え失せねばならぬ。即ち、私は殺されるのだ！」

この日の朝は霜の匂ひに明けやうとしてゐた。五時の鐘が鳴ると、私はいつものやうに床をはなれた。夜警と交替の看守が金盥の水を監房の窓口から入れてくれた。顔を洗つて三十分たつと、看守は割籠の飯に冷めたい味噌汁をそへて置いて行つた。「今に教誨師さんが見えるだらうから、氣を付けて靜かにして居れ！」その朝飯がなくなるころ、赤い電燈に照らされた監房への、暗い廊下に近よる靴音がきこへた。そして昨夜私に向つて、死刑の近づいた事や、死後の生活や、安心の道を説いてくれた色の蒼白い鼻の尖つた瘦せぎすの教誨師が窓口に現はれた。教誨師は僧衣の上に古ぼけた袈裟をかけてゐた。そしてこの監房の四角な小さい窓から

覗いて言つた。

「十八號！」

私は窓ぎわに立つた。

「はゝ。」

「お前は昨夜何を考へたか？」

教師は暗がりの中に、私の顔や私の目を探すやうな風だつた。

「私にとつて何より善いことを考へました。」

私はハツキリ答へた。

「それは何か？」

「死ぬことです。安心して死ぬ事です。」

「どうだ？」

「覺悟をしてゐます。」

「よし。お前はいよく今晚の十時に慈み深い阿彌陀の御許へ行く。會ひたいと思ふ人はない

か？！」

教諭師は心からの憐れみに聲を顫はせて言つた。私は答へた。

「ありません。」

「言ひ残して置くことはないか。」

「ありません。」

「食べたいと思ふものはないか？」

「ありません。」

「よし！ では晩の十時にまた會はう。心を落ちつけて、お念佛をとなへてゐるがよい。」

教諭師はさう言つて暗い廊下の向ふへ立ち去つた。――

私はダブ／＼した茶色の獄衣を纏ひ、鐵だらけの股引をはいた。それから兩手をうしろへ廻して氷室のやうに冷える監房の中を、のろ／＼と歩るきはじめた。そしてしづかに心の中にくり返しくり返し言つた。

「死は近づいた。今晚の十時には、一つの若い生命が、いよ／＼この地上から消え失せねばな

らぬ。即ち私は殺されるのだ！」

私はこの事實から遁れることが出来ない以上は、もはや此の事實に心の目を蔽ひかくさうと思はなかつた。私の澄み切つた心には今や死の恐怖など毛筋ほどもない。いや、私は死刑を宣告されてはゐるけれども、死ぬ時が来るなどとは假りにも思はれないと言ひたいのだ！

そんなら私は十七時間の後に私の上に落ちかゝつて来る運命がどんなに恐ろしく悲惨なものであるかといふ想像がつかないのか？ 否！ 私はこの茫漠とした宇宙のまんなかに只ひとりゐるやうな孤獨の部屋の中に立つたり座つたりして、いくたびか迫り来る死の場面を胸に描いたらう？ さうだ。私の目には先づ一番に私を絞め殺す場所と絞め殺す役人と絞索とが見えた。次に、今かうして茶色の上衣にくるまりながら、寒さと闘ふために部屋の中をのろ／＼歩いてゐる人間の五體が、ほんの三分か五分のあいだに冷たい力のぬけた無感覺の死體となり、粗末な棺に押し込められる。だらりと伸びた土色の髪の毛。ひどい匂ひのする顔。ふくらんだ歯。齒と齒の間からべろりと垂れ下つてゐる鬚ずんだ長い舌。これは全くほんたうことだが、しかし、私にはどうしても信ぜられない。まるでお伽ばなしか夢のやうだ。たとひ信ずる事が出来

るとして、それが私にとつて何であらう？ さうだ。蠟燭の灯が日光のまへに光を失ふやうに私の生命が一筋の絞索にかゝつて影を失ふ。それが何であらうか？ 私が殺人罪に問はれて死刑を言ひ渡された時は、成るほど、死の恐怖は嵐のやうな勢ひで私につかみかゝつた。この監房に投げ込まれた私は、「今日は殺されるか！」「明日は殺されるか？」と思つて堪えきれぬ不安と怯えに襲はれた。恐ろしくも忌はしい死の幻覺に、私は悩まされた。その苦痛は全く何とも言ひやうがなかつた。私は必死となつて幻覺を拂ひのけやうとした。それはまた愚かにも無駄な骨折りであつた。何故なら、それは決して長くつゞくべきものではなかつたからだ。私はいつまでもそんな幽霊にとりつかれてゐる性質の男ではなかつた。死ぬのが怖いのは、生と別れることの名残り惜しさに過ぎないではないか？ 生きてはゐられない、生きてゐるのはつまらない。では私の持つてゐる一つの小さい生といふものに少しの興味をも感じないといふのか？ いや。私は別に望んで自殺をしやうとは思はない。そんなら何故か？ きゝたまへ！ 私は實に素張らしく偉い事をやつてのけたのだ！ 煙の中や焰の中や、首斬り臺や十字架の上に命を落して眞つ直ぐに天上へ昇つて行つた幾多の英雄や殉教者たちの中に加へられる資格と

信念をもつて私は人を殺したのだ。いや、違ふ。私は他人の殺人を買つて罪を背負ひ立つたのだと言ふ方が真相に近い。では何の酔興でそんな事をやつたのか？ 私は學問を尊重し、學問の偉大な功績を何より崇める。そこで此處に一つ犯罪が起つたとする。そのためにある偉大な結果と貢獻とをもつた學問の研究がお流れにならうとする。もしもその犯罪者が私の父か或は兄弟であつたならばどうだ？ 私は身代りになるだらうか？ 言ふまでもない！ だから私はさうしたまでのことだ。光榮ある學問の研究のために！ これは何と云ふ尊い犠牲であらう？ これは何といふ美しい平和と誇りを心にもたらず企てだらう？ 永久に死ぬ事のない眞理のために、一つの見すばらしい人間の生命がフイになるといふことは、つまり不朽不滅の犠牲の精神の中に宇宙を動かす力となつて舞い踊ることなんだ。生命は短い。眞理は永久にある。私はさう信じて凡ての事をやつてのけた！ この考へは私の頭の中に渦巻くさま／＼の不吉な臆病な想ひをひと息に吹きとばすだけの力があつた。私の肉體はだん／＼疲れ瘦せ衰へるけれども、心の奥には楽しく歡こばしい不斷の安定があつた。かういふ考へは麗しいさま／＼の觀念を生み、生れた觀念は私の魂を酔はせて了つた。かくて私は死ぬことを怖れなくなつた。もと

より、死は偶然なもので自分とは何の縁もないものだと思はれて来た。私の性質から言つても、私はあくまで物ごとを明るく樂天的に、のんきに、考へるやうに出来てゐる人間なんだ。「今晚の十時には殺される。それが何だ！　ハツハツハ。死刑なんて五月の夜の微風のやうなものでいつでもやつて来い。驚く事もなければ、怖れることもない。一切の苦惱はあとかたもない。心のどよめきは鎮まつてゐる。この五體から息のぬけるまで従容として何も起らなかつたといふやうな顔をしてゐることが出来る今だ！　サアいつでも絞索を持つて来い。こつちから進んでブラ下つてやらア——こんなことを考へながら、私は監房の中をのろ／＼と歩るき廻つたが、歩るき倦いた私は床の上に身を横へて、しつかに眼を閉ぢた。すると思ひがけなくも、ゆるやかに閉された私の目には、たちまち、長い長い過去の出来事が鮮やかに鮮やかにパツと映つて来た。あやまつて古井戸の中へ落ち込む人が、底へと／＼くまでの刹那に生涯のことを一時に思ひ出すやうに、今！　ああ。二十三年間の生活が、ほんの昨日のことかなんぞのやうに、次から次へと恐ろしい迅きで頭の中に甦つて来た！　なつかしくも儚なき昔へ！　想ひ出の舟は今日を限りと徐ろにさかのぼる二十三年の昔へ！　そこに私は自分の生ぶ聲をきいたのであつた。



過去の一

だが、しかし、私は何處で生れたのか知らない。全く何處で生れたのかわからない。私はまた生れてから六年の間を、何處でくらしたかそれも知らない。が、さてどうやら自分といふものゝ存在に氣がついたのは六つになる年の暮であつた。もう十七年にもなる！ そのころ私は淺草公園裏にある木賃宿の一と間に寢起してゐた。剥げ落ちた壁とボロ／＼の疊のほかには何も無い。その一と間にはいつも汚ない厭な匂の薄團が布いてあつた。そして一人の瘦せ衰えた女が寢てゐた。私はこの女を母と呼んでゐた。母の枕もとにきちんと座りながら、私は張り子でこしらへた兎や熊の玩具に糸をつけたり繪の具を塗つたりした。隣りの部屋にはこの張り子の人形をつくつて玩具屋へおさめに行く獨り者の博奕打ちがゐた。私はこの人形師の手傳ひをしなが

ら少しばかりの金をもらつて母を養つてゐたのだ。生活は悲慘なものであつた。壊れた火鉢の中にあるものは灰ばかり、洋燈の壺にあるものは黒い垢ばかりで、晝は寒く夜は眞つ暗らだつた。ある日は只三つの馬鈴薯で空腹をしのぐこともあつた。ある日はまた一と握りの生米を嚙りながら寒さと闘つた。けれども、これは長くつゞくものではなかつた。私たちのまへには今にも押し寄せて來ることを覺悟をしなければならぬ。恐しい飢があつた。どうしてそれに打ち勝たうといふことを考へぬ日はない、が、いゝ智慧はなかつた。かうして一日々々と餓死の谷へ落ちてゆく、或る日のこと、隣りの部屋の人形師が私たちのところへやつて來てかう言つた。

「巧いことを思つたから實は相談に來たんだが、あつしのお店におさめる虎の子に疵ものが出來てハネられたんだ。だが、うつちやとくのは勿體ねえから、一ツ大道にならべて賣つて見てえのさ。まあウント賣れたら禮をするから、ね、おかみさん。一と晩だけ坊やを貸してくんぬるか？　手つだいをして貰ひてえんだが。」

私の母は斷ることが出來ないで、しぶく承知した。人形師は私をつれて公園裏の賑やかな